

『書籍類貸付控』からみえてくるもの

——酒田市立光丘文庫蔵田中家文書より——

基幹研究「十九世紀の出版と流通」研究班（酒田市立光丘文庫担当）

山本和明・青田寿美

はじめに

本稿は、先に本誌において報告のなされた弘前市立弘前図書館蔵「自他楽会資料」と同様、わが国における近代出版・流通の確立期前夜に出版された多くの書籍のうちから、人々はどのような書籍を選択し、どのように入手し、どのように読んでいたのか——そのことを探る試みである。酒田市立光丘文庫調査担当班として、ここでは、「自他楽会」に先駆けて明治十年代の書籍購入・回覧の状況が確認できる光丘文庫蔵田中家文書の関連資料四点をとりあげ、その翻刻、ならびにその資料群から窺える、書物を手に取り読んだ人々のことどもを報告したいと思う。

※

※

田中家文書については、『諸家文書目録Ⅱ』（酒田市立図書館・酒田市立光丘文庫編、平成九年三月）に以下のように記載される。

旧飽海郡中平田村大字熊野田、田中久氏旧蔵一八四六點。田中家は、

延宝六年（一六七八年）から明治初年まで、大堰守および肝煎役を代々勤めてきた家柄である。庄内藩川北農村の、土地・租税・農業用水・災害救恤・土木建築・金融貸借等の史料が幅広く残されている。特に農業用水関係では、山谷堤・泉谷地堤及び荒瀬川を水源とする各堰・水門の普請・修復・管理・用水配分・藩の用水関係通達・水争い及び、大堰守等の職務・任免等の貴重な史料が多い。

現在、一括して酒田市立光丘文庫に保管されるこの文書群のなかには、明治十年代、まだ熊野田村と称していた頃の、当主田中元介関連資料も含まれている。そのなかの数点が、特に明治初頭における書物の流通を窺い知る資料として注目できる。

『酒田市史』によれば「明治三十四年（一九〇二）十月、神尾一直・池田定祥・寺内等曜・成沢直太郎・松浦孝之助等一二名で書籍購読会を結成したことが酒田の図書館のはじまりである」（同下巻、第四章第二節〈新聞・雑誌の発行と書籍購読会〉、平成七年三月）とされる。一般の縦覧に供せられた図

書館とは言えないまでも、生石小学校校長寺内等曜が飽海読書クラブを創立したのが明治二十年一月のことであった（工藤昌見編『酒田市立光丘図書館史』昭和五十二年十二月）。今回紹介の資料は、それより遡るものと目される。元々、酒田における書籍サークルの魁であった「書籍購読会」（本誌次号にて関連資料翻刻予定）に連なる資料と推察し、ひとまず閲覧調査をしておいたものであったが、残念ながら「書籍購読会」との繋がりは見いだせなかった。しかし、この片々たる資料から窺い知りうることは大きい。明治十年代における予約出版書籍の購入や、書物の貸借状況まで細かく記載されているのである。

明治十年代、とりわけ明治十六年前後における「読者」像について考える上で、前田愛「明治初年の読者像」（『近代読者の成立』昭和四十八年十一月）での発言は、今なお重要な指針であろう。「穎才新誌」等を資料として挙げつつ、「十年代には民権運動に関心を寄せる青年たちの学習サークルがおり、びたどしく現われた」と指摘する。政治意識の昂揚を目標に掲げた青年の学習グループは、読書会と併行し政治演説の練習をおこなうことが多く、それを警戒した政府は、明治十五年七月に「学校生徒ニシテ學術演説ヲ為スハ教育上不都合ノ儀ニ付相成ラス」といった布達を各府県に送った。それを境に、青年たちの学習運動は下降線を辿りはじめたのだとする。そして、つぎつぎに学習サークルが解体してゆくなかで、もういちど青年たちの政治的情熱をたかめる役割を果たしたのが「経国美談」や「佳人之奇遇」といった政治小説なのであった。

酒田の場合はどうだろうか。

『庄内三郡／教育要覧』（大正元年九月・庄内三郡教育学会序文、光丘文庫蔵）によれば、飽海郡内の「各町村ニ於テ青年ノ精神修養ニ資スル目的ヲ以テ図書館及文庫ヲ設立シタルモノ尠カラズ就中酒田図書館（註―「書籍購読会」の後身、明治四十二年十二月改称）ヲ以テ最モ規模ノ大ナルモノトス」という状況にあった。また、同書が「郡内已設ノ文庫」として掲げる二十九箇所――最も早い設立の「北俣以文会／文庫」（明治二十五年三月設立）から「観音寺村図書館」（明治四十五年四月設立）まで、そのうちの半数以上が青年会（団）を母体として設立されていることが注目される。一旦沈静化した青年たちの学習サークルは、明治中期以降、日露戦争を節目として各地で青年団体として再生しあるいは新生するも、大正期に入って次第に官製化されていくことは既に先学の指摘するところだが、ここでは、そうした青年団体が実学の研鑽や地方自治への貢献以外に、書籍を回覧し講演会を催す他、新聞雑誌縦覧所や文庫設立の一翼を担ったことを指摘しておきたい。

一方、本稿で取り上げる資料群からは、政治的意識をもって集い、学習グループを催したという側面は見いだせない。残された貸借記録による限り、最も多く貸し出されているのは「法帖」の類であった。しかしながら、田中家に集い書籍の貸借をしていく面々のなかで、政治にたずさわっていた者の存在も確認できる。

今般紹介するのは、次の四点である。

同手藏田村三拾九番地

同《此以下不殘請取》佐藤三郎太

同生石村朝顯學校

同

二株金二円

石井龍幡
花藏及辨

合金六円 五名

外拾六錢為替手数料

十五年二月十三日登

内 四錢

田中

同 四錢

松沢

同 四錢 三月廿四日入

花藏

同 式錢

伊藤

同 式錢《十一月廿八日塚本より入》

齋藤

同 式錢

早坂

同 式錢

菅原

同 式錢

佐藤

同 式錢

朝 菅原

同 式錢《三月廿四日入》石井

同 式錢

豊田

同 式錢

木次

同 式錢

深田

此三口十一月廿八日塚本より入

同式円 十六年五月遣ス

外五十錢九分六月九日面会賃払

〔補紙〕

外五拾四錢五分適宜会社え十月中賃錢払

同式円十六年十一月十四日郵送

外五十式錢壹分七八贖相達賃錢十二月十一

日払

九十贖明治十七年二月廿一日相達于時八拾

式錢四分賃錢相払

漢書評林

松沢与五太

此代価四円五拾錢

内一円五拾錢 右第十五年三月廿四日為登

右両口ニテ為替手数料四錢書留料八錢

資治通鑑

田中元介

此代価九円

此代価式拾五錢

為換金手数料割

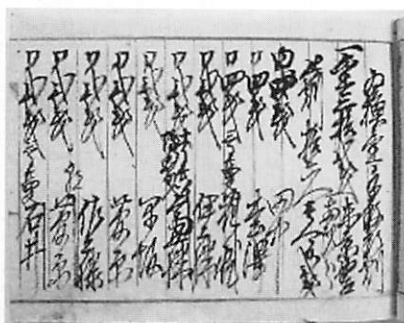
一金三拾式錢 東京仙台南所分

此割拾六人 壹人 五式錢

三月廿四日差遣ス

右為替手数料四錢書留印紙八錢

右次第十五年四月より一カ年分報告料也



この「覚書」には、博文書院（仙台区大町四丁目五番地）と東京印刷会社（東京々橋区弥左衛門町一番地）への「一株金一円」の株主をつのり、その「東京仙台南所分」への「為換金手数料」を、個々の株数に応じて負担してもらう割り振りが示されている。「十一月廿八日塚本より入」「三月廿四日入」といった記載からも、田中氏が徴収役など一定の役割を担っていたらしい。続く「資通通鑑」「漢書評林」の項には、それぞれに田中元介・松沢与五太の名が記される。ともに東京印刷会社から刊行された書物であった。田中・松沢、両者ともに東京印刷会社の「一株金一円」の株主であり、おそらく購求者を示しているのだろう。

田中氏の手控である資料①には、松沢氏の「漢書評林」のことまで記されている。「右両口ニテ為替手数料四錢書留料八錢」と、明治十五年三月二十四日に、「資通通鑑」の代価のうち一円（田中元介）と、「漢書評林」（松沢与五太）代価のうち一円五十錢とを決済手続きする際、併せておこなったか。個々で決済するよりは少しでも廉価に手続きたいというのは理に適っている。もう一つには、こうすることで重複することなく書籍を購入することにも繋がってこよう。一見して、高価な書籍の代価である。互いにその情報を交換しあい、少しでも多くの書籍を手近で閲覧できるよう模索するのは至極当然と思う。田中氏の手控えには記されぬまでも、博文書院と東京印刷会社に対し「一株金一円」を支払った人々は他にも存した。記された面々がそれぞれに、なにも株主となることだけで一円もの金銭を醸出するはずもあるまい。

以下、持株対象であった「東京印刷会社」に焦点を絞り、考えることに

したい。「博文書院」については、「報告書注文」「一カ年分報告料」とあるものの、その実態については未だ確認できていない。後考を期したい。

東京印刷会社社長鈴木義宗に対して支払われた「一株金一円」の持株は、「新しく不安定なメディア」「予約出版」にともなう株主社員となるための投資であった（ロバート・キャンベル「規則と読者」「江戸文学・平成十二年」）。明治の予約出版とは、「刊行に先立って購読者をつのり、事前に徴収した入社金、前金、または配本ごとの代金を当て、その人数分だけの部数を出版販売するというのがおおかたの定義」である。田中元介以下、五名の株金が社主のもとへ送られたのは「十五年二月十三日」のこと。国文学研究資料館作成「明治期出版広告データベース」を利用しつつ、以降、新聞広告をもとに確認していくならば、東京印刷会社の場合、明治十四年五月にはすでに「出版社員」の募集広告が掲載されている。

出版社員募集広告

今般我同志ノ輩相集リ和漢ノ歴史ヲ始メ有用ノ諸書ヲ活版ニテ印刷シ原価ヲ以テ社中ニ頒タンコトヲ謀リ会社ヲ結デ西紺屋町ニ活版ノ工場ヲ設ケタルニ此挙ヲ聞テ加入ヲ望ム者甚多ク日ナラズシテ社員既ニ千余名ニ及ビタリト雖トモ活版ハ印刷ノ部数多キニ随テ其価愈々廉ナル者ナレバ猶ホ博ク社員ヲ募テ其便益ヲ共ニセントス同志ノ諸君ハ御加入アル可シ今回着手ノ書籍ヲ左ニ掲グ

史記評林 中本五十冊 予算定価三円八十銭

価額ハ報告スル所ヨリ超過セシムルコトナシ自余書籍ノ予算定価推テ知ル可シ

猶ホ約束及書籍体裁ハ出版方法書ニ記載有之候間御望ノ方ヘハ御申越
次第郵送可致候

東京日本橋区松物町四番地 東京印刷会社

(東京日日新聞・明治十四年五月四日)

遺憾ながら、ここに言う東京印刷会社の「出版方法書」なるものを確認
できていない。そのため、いま「出版社員」の有様を窺ううえで、参考
として、博聞社の場合を例にとろう。

「博聞社同盟出版方法大意」には、「○同盟中ニテ五千名ヲ限り株金二円
差入ノ向ヲ同盟定員ト称シ同盟定員ニ限り特別ノ便益ヲ計ルヘシ尤株金ハ
預リ証券ヲ出シ満期ノ節返金ス」(東京日日・明治十六年十月六日「博聞社 同
盟出版広告」とある。この場合「株金二円」は満期の際に返金されるもの
で、同盟定員となることで「同盟定員ニ限り予約実価ノ五分引」との「特
別ノ便益」もあった。東京印刷会社の場合「一株金二円」にて「出版社員」
となり得たということになる。特別の便宜があったかどうかは定かではな
いが、「書籍類貸付控」で二株購入する者がいるところをみれば、あるいは
博聞社同様の便宜があったのかもしれない。

予約出版である以上、ある程度「社員」を募り、その人数に応じて摺数
を確定していくものだったはずだ。東京印刷会社でも明治十四年五月段階
で「社員募集広告」で一千人余りの社員を集めていたが、それから一年近
く経た明治十五年二月、東京日日新聞に「史記評林再版広告」を掲載。再
び社員募集がなされている。

史記印刷ノ分配達後該書注文ノ数愈々増加シ去十一月解版後本月十五

日迄新規申込既ニ八百七十余部ニ及ヒ候処折角ノ申込空ク謝絶スルモ
不本意ノ次第且創業ノ際遅聞ノ人モ多カルベキニ付這回限り資治通鑑
着手ノ前更ニ解版ノ部分ヲ補刻シ同志諸君ノ芳命ニ答ントス望ノ方ハ
御入社ノ上来二月中ニ御注文アルベシ(代価ハ従前通り前金三円八十
銭)方法書入用ノ向ハ府内ハ一銭府外ハ二銭ノ郵便切手御送附アレ
東京々橋区弥左衛門町一番地 東京印刷会社

(東京日日・明治十五年二月九日「史記評林再版広告」)

「創業ノ際遅聞ノ人モ多カルベキニ」といった表現もなされており、再度
社員募集をした際、つまり「書籍類貸付控」にある「十五年二月十三日」
とは、田中元介たちにとつて、その機を逃さぬ募集応募だったのである。

「十一月解版後本月(註一)月慙十五日迄新規申込既ニ八百七十余部ニ及
ヒ」といった宣伝をそのまま真正直に受けとることはできないが、多少の
脚色を割り引いてみても東京印刷会社版「史記評林」の人氣は凄まじい。明
治十五年十一月二十二日付、東京日日新聞には「史記第三回印刷廣告」が
なされており、「第一着ノ出版トシテ三千部ヲ印刷」「追々ノ申込猶其需求
ニ応ズルニ足ラズ再ビ三千部ヲ増刷」して六千部を捌き切り、「這回通鑑漢
書第一回配達ノ終ルヲ時トシ本月ヨリ着手シテ更ニ二千部ヲ印刷」と、さ
らに二千部を追加することを喧伝する。その「今回印刷ノ二千部モ予約相
満候」で「更ニ二千部ヲ増刷シテ諸彦ノ愛顧ニ応ヘン」と、明治十六年一
月十七日付の東京日日新聞広告で謳っている。つこう一万部ものベストセ
ラーということになるのか。もちろん、こうした謳い文句で読者の購買欲
をかき立てていったことは言うまでもない。ただ、先に呈示した持株社員

の存在を考えるならば、酒田の地に東京印刷会社版『史記評林』も存していたと考えておく方が順当であろう。

持株会員の増加は、『史記評林』の人氣にとまらず、『第二着』（第二彈の意）『第三着』へと続き、東京印刷会社でも多くの出版物を手がけることに繋がっていった。東京日日新聞（明治十五年二月二十八日）広告では、『第二着出版広告』として『資治通鑑』『漢書評林』刊行に到るいきさつを物語る。そしてその購求にあたったのが田中元介と松沢与五太だったのである。

第二着出版広告

○資治通鑑 合本百冊 価金九円

○漢書評林 合本五十冊 正価金四円五十銭

両書何レモ社員冀望ノ多数ニ依テ句読反点ヲ附ス

弊社出版第一着史記モ本月全ク植字ノ業ヲ終リ候ニ付社中一般第二出版書籍ノ投票候処通鑑漢書両書ノ数殆平分致シ候得バ何レヲ先ニスルモ社中半数ノ冀望ニ背カザルヲ得ザルニ依リ一方ヲ先ニシテ一方ノ冀望ニ背カンヨリハ寧ロ奮勵一時両書ヲ出版スルコトニ決セリ（来三月ヨリ着手落成期限ハ十二個月ト予定ス但シ方今ハ職工モ皆其業ニ熟シ器械活字等モ既ニ充足シタレバ決シテ此予定ニ違ハザルヲ確保ス）御望ノ方ハ期ニ後レザル様速ニ御申込アル可シ方法書及書籍体裁見本等入用ノ向ハ府内ハ一銭府外ハ二銭ノ郵便切手御送附アレ
追テ大部ノ書ハ五回或ハ十回ニモ配達致度候得共配達度数多キトキハ随テ運送費相嵩ミ候ニ付両書配達何レモ三回トシ送金ハ便宜ノ為メ通鑑ハ五回（最初一円其後三個月毎ニ二円宛）漢書ハ三回（最初一円五

十銭其後六個月毎ニ一円五十銭宛）トス尤都合ニ依リ二三回或ハ四五回分取纏テ前送アルモ妨ナシ

東京々橋区弥左衛門町一番地 東京印刷会社

「通鑑ハ五回（最初一円、其後三個月毎ニ二円宛）、漢書ハ三回（最初一円五十銭、其後六個月毎ニ一円五十銭宛）」の言葉通り、田中元介が最初の一円を、松沢与五太が最初の一円五拾銭分を郵便為替手続をしたのは、明治十五年三月二十四日のことであつた。

「来三月ヨリ着手」されたはずの『資治通鑑』『漢書評林』も、実際に刊行に到るには相応の時間を要した。

「右書注文遠隔地方ノ如キハ通信往復ノ間多クノ日数ヲ費スニ依リ成文期限ヲ延ベ置候得共植字出来ノ分追々印刷ニ取掛候得バ最早長ク猶予モ相成兼候間両書注文愈々来月ヲ限ト致候」と広告されたのは明治十五年五月十八日（東京日日）。田中元介は三月二十四日に申込済だったわけだが、出版社は、六月に至るまで社員の募集をし、印刷に取りかかる直前を予約メ切としている。「猶ホ資治通鑑ハ来月上旬ヨリ發送ニ取掛リ、漢書評林ハ続テ發送ノ都合」と東京日日新聞に掲載されたのが明治十五年九月八日。『資治通鑑』が一二兩帙で元版の五十七卷迄、『漢書評林』初帙が元版の二十三卷迄、各々最初に刊行されている。明治十五年十一月四日広告に「右落成ノ分配達相始候ニ付」「書籍御受取ノ方ハ本人代人ニ関セズ書籍予約金ノ受取証ト認御持參可被下候事」（東京日日）とあるのだから、実際に、先の広告に言う十月から刊行されていたと思しい。

田中元介は、『資治通鑑』代金を五回に分けて郵便為替で送っていること

が先掲翻刻でも確認できる。その手控えに従えば、一円を「十五年三月廿四日遺ス」、四円を「同十月七日遺ス」という具合であった。この四円という金額は、二回分に相当するものである。「尤都合ニ依リ二三回或ハ四五回分取纏テ前送」したのである。

しかし、その受領証がなかなか届かなかったようで、「落成ノ分配達相始候」と東京日日新聞に広告された十一月四日の一日前に、代金送金の受領有無の問い合わせ、並びに配本督促の手紙を送っている。その下書が資料②田中家文書一四九七「〔資治通鑑代金送金分、受領の有無照会状案文〕」にあたる。(一六・一種×八・九種 なお□は未判読文字)

【資料②】田中家文書一四九七 「〔資治通鑑代金送金分、受領の有無照会状案文〕」

客月七日酒田郵便為替ニテ資治通鑑代金之内四円、通送致候處相達候
歟如何未御領受証到達相成不申致サズ候而□□近日御報知被下度尤右
本出来北落成次第早速陸通運ニテ御通送被下度候也

第十五号十一月三日

東京の新聞では、書籍受け取りに直接来社の場合には予約金受取証と印鑑を持参、と宣伝される一方で、遠く酒田の地では、送金してから一箇月ほどを経ても、いまだ「書籍予約金ノ受取証」すら送られてこない状況にあった。「弊社創立以来事務ノ繁忙ナルヨリ予約書籍ノ外一切他ノ印刷ヲ謝絶罷在候」(東京日日・明治十六年三月十三日)と、千人単位で購読者を募

る東京印刷会社の多忙ぶりと、不安に思う元介の姿を交錯して想像するに難くない。

さて、「資治通鑑」の第二回配本(配達分)は、明治十六年一月二十五日より開始。「資治通鑑」の第二回配達分は、三四両帙にて元版の第百十四巻迄、「漢書評林」は二三両帙で第六十巻迄であった。「右両書前記ノ通印刷相済候ニ付漢書ハ二回通鑑ハ三回以上御入金済ノ分ヘハ当月二十五日より配達相始可申候這回ハ必ず規約ノ如ク逐次御送金可被下候」(東京日日・明治十六年一月十七日広告)とあり、規約に従えば送金後の配本である訳で、先に四円を送金済みの元介も、「同十二月廿九日遺ス」と、前年の十二月に二円を為替送金し、小計七円を既に郵便為替で振り込んでいることになる。たとえば次のような一文は、広告文中に頻繁に垣間見られるものであった。

・(註「史記評林」) 幾ニ全部ノ落成ニ際シ半額入金ノ分ヘモ夫々若干冊ヲ及配賦候得バ余ハ残金ノ到着ヲ待テ発送可致サズ候処残額未済ノ向モ往々有之ハ全部製本済御承知漏モ有之ヤト更ニ及報告候(東京日日・明治十五年九月八日広告)

・尚弊社書籍ハ定規(註「規定の意」)送金到着ノ上発送ノ筈ニ付通鑑漢書ノ如キモ定規ヲ追テ御送金ノ分ハ夫々及発送候処定規送金未済ニシテ書籍督促ノ向モ有之ハ或ハ方法誤解ノ方モ有之ヤト此段為念致報告候ナリ(東京日日・明治十五年十一月二十二日広告)

・右刻成候ニ付御送金済ノ分ヨリ送本仕候間御送金未済ノ向ハ速ニ御送致可被下候尚ホ史記漢書ノ如キハ既ニ再版三版迄モ出来候処猶代価

未済ノ向モ有之發送ニ差支困却罷在候間延滞ノ分ハ早速御送金被下度
書籍ハ代価到着次第直ニ御廻送可申候（東京日日・明治十六年十月十二日
広告）

予約出版である以上、摺数の確定が容易である反面、その大前提となるのは、出版社員からの送金であることはいうまでもない。しかしその前提が成立しなくなつたとき、出版社は元々自転車操業だつたのだから危うい。その点でも、元介は、至極真面目な出版社員だつたといふべきであろう。

明治十六年三月十三日の東京日日新聞広告では、『資治通鑑』の定価を「正価金十二円五十銭」に値上げをし、追加千人の出版社員を募集したことが示される。他にも「当二月ヨリ更ニ解版ノ部分（通鑑第四帙迄漢書第三帙迄）ヲ補刻シ這回ハ社中配賦ノ後ナルニ依リ社員内外ニ関セズ御注文ニ応ジ候」と、社員へ配布の後には、一般の注文にも応じるといふのだ。

「猶再版ノ方漢書ハ三帙迄通鑑ハ四帙迄三版史記ハ全部出来相成候処何レモ余部有之丈ハ這回限社員外ヘモ原価ヲ以テ分版候間御入用ノ諸君ハ売切不相成内速ニ御注文アルベシ」（絵入自由新聞・明治十六年五月十日）と、当初と異なり「余部有之丈」の社員外販売も謳われてゆくのである。

配本段階で代金を支払うことなく購入を中断する読者が増えれば増えるほどに、「余部有之丈」の印刷済の書冊はなんとか捌かなくてはならず、かといつてそれ以前の配本などはすでに「解版」されている始末。それを「補刻」し、再度摺る手間が生じてゆくばかりである（「補刻」とは何か、が改めて問われてこよう）。大部な書冊の場合、そうした不安は書肆の側にもあつただろうし、購入する側にとつても完結に到りうるかという不安は

残つたことだろう。

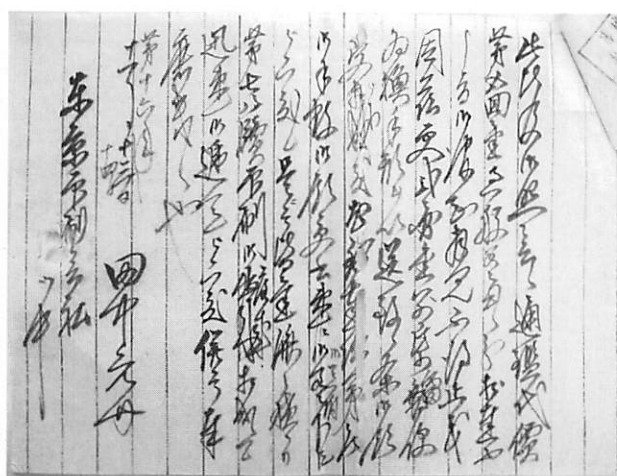
そもそもこうしたことを繰り返してゆくならば、「出版社員」すなわち持株社員となることの意味は薄らいでゆくに相違ない。株主を募り、その元手を資金として出版してゆく、弱小出版社の勃興を促す「新しく不安定なメディア」の継続などは覚束なくなるのも当然であつた。（ちなみに東京印刷会社の最初の刊行物である「史記評林」も、第三回印刷広告（東京日日・明治十五年十一月二十二日）で正価を「金四円八十銭」に値上し、かつ「希炎ノ諸君ハ社員内外ニ関セズ正価ノ半額（二円四十銭）ヲ入テ御予約アル可シ但書籍二十冊丈送達候節ハ残金御送致可被下候」と、社員内外に関係なく売り出し広告がなされている。）

『資治通鑑』五六両帙（自百十五卷至百七十四卷）と『漢書評林』四五両帙（自六十一卷至大尾）が完成し「追々送本可致候」のは、明治十六年五月二十日以降のこと（絵入自由新聞・同年五月十日広告）。完結に到つたのは同年十月になつてからであつた（東京日日・明治十六年十月十二日）。『資治通鑑』第四五両回發送分 自第百七十五卷至大尾」とあることから、七帙から十帙（計四帙分）を一括發送したようだ。

五六両帙が完成する明治十六年五月、元介は「同貳円 十六年五月遣ス」と二円を送金している。「外五十銭九分六月九日面会貸払」とあるのは、東京印刷会社から送付されてきた日時を示すもので、金額は通送料に該当しよう。当初示されていた代価九円はこれで終わったはずなのだが、どうもこの点で問題が生じたいらしい。そのことを裏付けるのが資料③「〔資治通鑑代金送金の状況〕」である。この資料③は請取証の原物（二・八厘×九・五厘）と送金状控（二・五・九厘×二・二・二厘）からなる。



〔書留郵便物請取證 第十一ノ一八四号〕請
取人宿所氏名 東京印刷会社／差出人宿所氏
名 田中元介／書状 宅通／（印 羽後国酒
田郵便局）／明治十六年十一月十四日



此比及御照会候通鑑代価第五回金過般差出候
分相達不申旨御報知拝見不得止義因茲更式円
金別紙酒田郵便為換手形ヲ以送致候条御領受
相成被下度尤郵達次第御手数御領受書連并
御差下御送附被下度候是ニテ皆金済之積リ
第七八牘印刷御出来落成相成候ハ、迅速御通
送被下度併テ奉庶幾候也
第十六年十一月十三日十四日 田中元介
東京印刷会社 御中

残存する書状控がこの一通のため、ことの経緯は十全には分かりかねるが、
「通鑑代価第五回金過般差出候分相達不申」との東京印刷会社からの通知
に対し、「不得止」二円送金、「是ニテ皆金済之積リ」と念を押し「第七八
牘印刷」出来次第「迅速御通送被下度」と、元介は催促している。既に支
払済みと思っていたところに追加で二円とは厳しい。それも資料②の手控
のごとく、念押しの書翰を送ったうえなのだから。

元介の手控によれば、「七八牘」が相達し、郵送料「五十式銭壹分」を支

払ったのが十二月十一日、最後の「九十牘」の到来は「明治十七年二月廿
一日」になってからで、「八拾式銭四分」の賃銭（郵送料）を支払ったこと
が記されている。「弊社創立以来事務ノ繁忙ナル」（東京日日・明治十六年三
月十三日）とは言え、このように、金銭を振り替えたことを記録し、誤りな
く手続きすることができないならば、出版社の信用を失わせていったこと
は確かであろう。「予約出版」の「不安定」ぶりが窺えよう。

『書籍類貸付控』からみえてくるもの・その2

先章では、田中家文書『書籍類貸付控』前半箇所から判る事項をまとめてみたが、本章では、続く『貸付控』に該当する箇所を翻刻し、確認できた事柄を報告してゆきたい。

その配列を年次記載より確認してみても、後から整理し綴じ合わせたものではなく、順次記されているようである。但し、貸し出し後、「返ル」等の言葉が貸し出し図書の項目に記され、返却確認がおこなわれている。その筆も一様ではなく、幾人かの手によって記されている。複数の人の関与を想定してみると、田中氏個人宅の蔵書を貸し出していただけなのか、お互いの家を持ち得ている蔵書の貸借がなされていたのか、あるいはある種の読書サークル的な機能を持ち合わせ、田中家で蔵書預かりをしていたか——そうした様々な可能性を模索してみたいところであるが、残念ながら

に残された資料だけでは何とも言えない。貸借の期間が一年を越えているものもあり、サークルとしてやっていたとすれば、少々気になる処である。いまは順当に田中家蔵書とみておくことにしたい。地縁という緩やかな繋がりの中で、蔵書の情報が交わされ、貸借に及んでいたのであろうか。瞥見するに、明治期に到ってから刊行されたものも多い。読書行為というものが、貸本を借りる段階から、個人が書物を購入するという段階へといたった時に、蔵書家の周縁には、その個人蔵の書冊を借り来った多くの人々が存したことであろう。この資料はそのことを如実に物語ってくれているのかもしれない。

翻刻に際し、返却を示す傍線消はあえて示していない。「」内は、一行に記されたなかで、別時期に記された言葉と思しき場合に用いた。改行されている場合には、あえて用いてはいない。手控えといった性格ゆえになかなか判読しづらい文字もある。□はそうした箇所である。以下、翻刻本文を示す。

【資料①】 田中家文書八九九 『書籍類貸付控 (持株の覚書あり)』 (後半)			
大野氏へ			
頼山陽摺手本	〔返ル〕	老冊	
日本地誌要略	〔シ〕	老部	
皇朝史略	〔シ〕	老部	
物理階梯	〔シ〕	老部	
修身論	〔シ〕	老部	
十八史略			
草訣百韻歌		〔シ〕	老部
化学書	〔シ〕	三冊	
菱湖楷書手本		一冊	
十九年三月廿三日貸			
皇朝史略		五冊	
廿年五月廿九日貸ス			
統皇朝史略		三冊	
右同上			
米芾行書法帖		一冊	
董其昌行書		一冊	
同 草書		一冊	

廿年九月十八日貸

国法汎論〔廿二年九月返〕 一冊

□□□□分 三冊

廿一年一月廿八日

淳化法帖義之八ノ三 一冊

同義之十ノ二 一冊

廿三年一月廿日貸

佐藤三太郎氏へ

菱湖手本 老冊

堀彦右衛門氏へ

全〔返ル〕 老冊

馮銓〔第十七年四月十八日〕 老冊

松井助三郎

柳荒美談 老部

天下茶屋仇討 老部

荒川武勇伝 老部

右第十六年六月廿五日返取ニ相成

松本氏へ

時事小言 〔返ル〕 老部

作文之助 〔返ル〕 老部

山陽手本 〔返ル〕 老部

一山家集 老冊

一今古集 〔返ル〕 老冊

一八重垣〔十二月十二日返ル〕 五冊

小以七冊 第十七年九月廿二日貸

一漢楚軍談 全部

一阿漢記事 全部

小以十八年三月五日

佐々木新太郎氏へ

新論 全二卷

小説粹言 全五冊

文則 全一冊

文章緒論 全一冊

世説 全十冊

小以十九卷第十六年七月十四日貸

十二月卅日返ル

淮南子〔十七年一月廿二日〕 全六卷

十二月卅日貸〔返ル〕

外逸史拾三卷 堀を不遣

直ニ相返候筈

伊藤田麻呂

詩林良材 〔返ル〕 五冊

伊藤俊龍

第十六年八月廿二日

淳信楷書千字文 貳冊

十九年三月返ル

建部誠慎

十六年十月七日

菱湖楷書千字文下卷 老冊

廿年七月十日返ル

時岡淳徳子

一史記 拾卷

但列伝十五ヨリ廿四卷迄

第十七年一月三十日貸

第十八年六月九日返ル

相蘓常松

一 菱湖楷書蘭記

壹冊

廿二年十月十四日歸ル

菅原藤一

十七年二月一日〔返ル〕

菱湖楷書手本

一冊

標註詩經

一部

同 書經

一部

柳荒美談

〔返ル〕 一部

山陽七絶帖

〔返ル〕 一冊

新論〔四月廿日返ル〕

一部

本間悦藏

山陽唐詩選手本

一冊

第十七年十二月廿七日貸

〔返ル〕

堀豊朗

米芾手本

一冊

七書

二冊

但十九年二月中貸

〔返ル〕

加藤金藏

一 趙子昂大学摺本

一冊

廿一年一月返ル

右第十九年十月六日貸

中川清藏

一 蔡高楷書千字文

一冊

右明治廿年一月貸

太田正道

一 産語

〔返ル〕 三冊

右明治廿年一月貸

菅原藤一

一 鍛冶早見書

〔返ル〕 一冊

右廿二年二月十五日貸

浪谷茂作

一 蔡高楷書手本

一冊

廿二年七月廿六日返ル

一同行書手本

一冊

一 思恭行書手本

一冊

右明治廿年七月廿四日貸

〔返ル〕

関長龍

廿年九月十二日

一 趙子昂大学摺物手本

一冊

廿二年十月十一日返ル

本間悦藏

一 菱湖楷書初卷

一冊

廿年十月廿一日

廿一年二月廿八日返ル

黒部重助

一 思恭手本

一冊

右明治廿一年三月八日貸証書有

松本謙吉

一 革命史鑑

六冊

一 無病新法

〔返ル〕 一冊

右廿一年三月四日貸

一義之浪恵堂法帖 一冊

右廿一年五月二日貸〔返ル〕

一義之淳化法帖 一冊

堀豊朗

一方法正理 一冊

但前一部直ニ返ス

明治廿一年五月九日貸

佐藤清吉へ

廿一年九月廿日貸

一前々太平記〔返ル〕 廿冊

伊藤林殿

一趙子昂菊亭帖 一冊

廿二年三月廿四日貸

一同大学法帖〔返ル〕 一冊

廿三年一月五日貸

伊藤田麻呂

一隸字法帖〔返ル〕 一冊

但 問経堂帖式卷目

右廿二年四月八日貸

本間悦藏

一論語徴〔返ル〕 六冊

右四月十日貸廿二年也

すぐに相返り追々五六冊も貸置

杉山繁三郎

廿三年一月廿七日返ル

一書法詳論 貳冊

一隸字法帖四 壹冊

一篆字書法 壹冊

〔此式帖返ル〕

右七月九日貸廿二年

廿三年一月廿七日返ル

一隸字法帖一三 貳冊

右八月廿一日貸 廿二年

一同二卷目〔返ル〕 壹冊

右廿三年一月廿七日貸

加藤大作

一懷素永興帖 一冊

右廿二年春中貸

十二月返ル

松沢誠吉

一菱湖草書 一冊

右廿二年九月廿七日貸

大野氏

一問経堂法帖四 壹冊

右明治廿三年二月十六日貸

一程亦城懸物 貳幅

右明治廿四年一月十三日貸

菅原藤一

一菱湖楷書法帖一 壹冊

一勝□□同上 三冊

右廿三年四月十二日貸

一淳化法帖 一冊

右同年

伊藤俊龍

一義之十七帖

一冊

田中祐七

右廿三年二月廿三日貸

明治廿四年十一月五日使下女

但桐箱入

一元享帖

老冊

一草叢

四冊

一前赤壁帖

一冊

一瞥して気づくのは、貸付られた本の多くが「法帖」の類であつたといふことだ。漢学の復権とも相俟つて、書蹟を模刻した楷書・隸書などの法帖の類が、明治のはじめに数多く刊行されている。読書というよりも実用書として希求され、貸し出されたと思しい。ほかにも庄内藩の藩校致道館ゆかりの徂徠学関連書である「論語徴」や、太宰春台「産語」なども存している点に特徴がある。

『書籍類貸付控』に記された書名が、貸付にあたつての備忘として記されているため、外題・内題が反映されず、該当する書冊を検証することは十分に果たしていないが、それでも書名と冊数からある程度確定できたもののうち幾つかを、紹介してみたい。

書法や漢学絡みでは、たとえば杉山繁三郎貸借（明治二十二年七月貸）の「書法詳論 貳冊」がある。この書冊は、明治十八年鳳文館発兌の石川鴻斎著「書法詳論」のことで、木版摺唐装全二冊からなる。松本氏（註）松本謙吉のことか）貸借の「作文之助 老部」は、おそらく大槻東陽著訳「作文ノ助ケ」のことで、寸珍本体裁の一冊（登利屋儀三郎発行）であつた。その内容は「此書ハ総テ助字若クハ同訓異義ノ文字ヲ集メテ弁解シタル者ニシテ最モ初学必用ノ書ナリ」（東京日日、明治九年五月十六日）とするものであつた。

政治関連の書冊にも注意したい。松本謙吉貸借の「革命史鑑 六冊」は、久松義典纂訳「泰西ノ革命史鑑」正編三冊続編三冊のことで、巖々堂から刊行された。全編完結したのは明治十八年に至つてのことである。堀豊朗貸借の「万法正理 一冊」は、孟德斯鳩（モンテスキュー）著、何礼之訳「万法精理」の洋装合巻のことだろう。馬喰町の島村利助ほかの刊行で、上巻（自第一卷至第二十卷）が初版明治十二年一月刊、下巻（自二十一卷至三十一卷）が明治十三年一月の刊行である。「一冊」というのだから、そのいずれかの巻であつたか。大野氏借りる処の「国法汎論 一冊」は、元々文部省蔵版全十一冊からなるブルンチュリ著、加藤弘之訳の書冊である。「活版西洋形本一冊二ツツメ」、岩本忠蔵より「元価一円二十五銭」で売りに出されたのは明治九年一月のこと（東京日日、同年一月二十七日広告）。明治十三年六月に弘令本社出版局より売り出された「泰西ノ国法汎論」（西洋綴全一冊）では、「定価六十銭」と廉価になっている。こうした政治や法に関わる翻訳書の類が、明治十年代から二十年代にかけて、広く人々に読まれていた証左であろう。

加えて、「漢楚軍談」「両漢記事」（松本氏）、「前々太平記」（佐藤清吉）、「逸史」（佐々木新太郎）などの書冊に交じり、「柳荒美談」「天下茶屋仇討」「荒川武勇伝」（松井助三郎）といった実録本の類が架蔵されている点も注目

しておきたい。明治十五年一月以後、榮泉社より「今古実録」シリーズが刊行されており、「増補柳荒美談 全部五冊定価金一元」と「敵詩天下茶屋

上下二冊定価金四十銭」の二点が今古実録からも刊行されている。しか

し、この蔵書は、どうやらそのシリーズ本ではなさそうである。藤沢毅氏作成「今古実録」刊行年表稿（「今古実録」シリーズの出版をめぐって、国文学研究資料館編「明治開化期と文学」臨川書店、平成十年）にしたがえば、前者が明治十六年二月刊、後者が同年十月刊であった。「右第十六年六月廿五日返収ニ相成」と記載されていた以上、少なくとも「天下茶屋仇討」が今古実録ではあるまい。ただ、当時における実録本の人気のほどは十分に窺えよう。

それにしても、こうした蔵書が全て田中家のものであったならば、相應の蔵書家ということになろう。資料④田中家文書一九六九（大日本史十三巻の受取）証（二四・八種×三四・九種）は、明治九年八月の日付をもつ受取証一枚だが、どのような背景があるかは未詳。ただ、貸し与えたにせよ、売り払ったにせよ、この一枚からも、田中家は多くの蔵書を持ち合わせていると思しく、仮に貸借の事実を物語るものとすれば、明治九年段階でも既に、書物をめぐって一定の貢献を果たしていたことになろう。

【資料④】田中家文書一九六九（大日本史十三巻の受取）証

証

一 大日本史 拾三巻
右正ニ請取候也

九年八月四日 加藤成吉（印）
田中元助殿

明治十八年十月に各学校ごとに作成された「学校沿革誌」（光丘文庫蔵）のうち、「文測学校沿革誌」には、明治十三年校舍新築に際し、田中元助を「衆人ヲ勧誘シテ新築ノ功ヲ奏セシム」「学事尽力者」として記しており、相應の金額を寄付していることも確認できる地域の篤志家であった。ちなみに、文測学校は田中元助の居住する熊野田村の通学校区にあたる。

※

※

ところで、「書籍類貸付控」に見いだした人々、すなわち田中家に集い、株主社員となっていた者、あるいは書冊を貸借していた者たちは、いったいどのような人々だったのだろうか。記載された名前を手がかりに、簡条書きにして幾人が紹介しておこう。

松沢与五太……明治十八年で地価金二万円を超える土地所有者。明治十五年五月頃自由党山形県支部結成の集会にも参画し、明治十六年二月「両羽日々新聞」発行にあたっての支持者の一人であった（酒田市史）。

伊藤文造……文測学校（資料①）。文測学校に明治十五年五月まで准訓導として在。同校に明治十四年高額寄付（文測学校沿革誌）。誠信学校にも兼任期間あり（誠信学校沿革誌）。

齋藤寛平……文測学校（資料①）。文測学校に明治十六年十二月まで訓導として在（文測学校沿革誌）。

早坂四方吉……文測学校（資料①）。文測学校に明治十五年二月まで授業生として在（文測学校沿革誌）。

菅原重太郎……朝顔学校（資料①）。

豊田四番士……士族。明治十一年五等授業生（小見学校沿革誌）。誠信

学校に明治十五年八月四等訓導拜命（誠信学校沿革誌）。

木次辰吉……誠信学校に明治十四年五月一等教員補助として任（誠

信学校沿革誌）。

深田摠七郎……文測支校（資料①）。

佐藤三郎太……文測学校に明治十四年二月高額寄付（文測学校沿革誌）。

石井龍幡……朝顔学校（資料①）。

花藏及辨……朝顔学校（資料①）。

堀彦右衛門……文測学校世話掛。明治十四年二月同校に高額寄付者

（文測学校沿革誌）。

佐々木新太郎……文測学校に明治十六年六月に訓導として赴任（文測学校

沿革誌）。

伊藤田麻呂……文測学校に明治十三年六月まで准訓導職として勤めた

（文測学校沿革誌）。

時岡淳徳子……若いときに江戸で修業した医師で、明治十年鮑海郡開

業医公会開設後では役員として名を連ねている（酒田市史）。

菅原藤一……文測学校に明治十五年十二月まで一時雇として在。明

治十三年に一部菅原藤一の土地を借地して校舎新築（文測学校沿革

誌）。

堀豊朗（明）……旧庄内藩の大庄屋で明治に入り士族となった人物

（酒田市史。明治六年九月より同八年六月まで鮑海郡第五番学区

取締（嶋田学校沿革誌）、明治九年には藤波学校新築世話掛を拝命し

ている（藤波学校沿革誌）。

黒部重助……明治十四年、明治十七年、誠信学校世話係（誠信学校沿革

誌）。

すべての人を網羅したわけではないが、学校に関わる教員・吏員や地主などの富裕層などが多く関わっていることが判る。「法帖」の類が多く貸し出されているのも、じつに教育に従事する上での必要な書籍だったのだろう。当時の教師の地位を思うならば、田中家に集う人々は、決して誰でも可というわけではなく、職業的にも、地域的にも限られていたようだ。だからこそ一年を越える貸借があっても、次の貸借も許されているのではなからうか。

集うた者たちのなかで、特に注目したいのは松本謙吉である。「荘内日報」HPに掲載される「郷土の先人・先覚」を参照するに（<http://www.shonai-nippo.co.jp/square/feature/exploit/exp190.html>）、謙吉は田中元介の五男として生まれ、新田目村の松本藤十郎家の妹娘の鼎に養嗣子に入った。ちなみに姉娘登志に養嗣子に入ったのが、自由民権運動で大いに活躍した松本清治である。謙吉も同様に政治の世界に入り、地方政治に果たした功績は大きい。「謙吉は若くして自由民権運動に入り、蔵岡の島海時雨郎らと共に、森藤右衛門のあとを継いで活躍している。森が発行し、政府への言論戦を展開した両羽新報を、明治年島海、謙吉らが荘内新報と題して自由民権を主

張し、明治年の第1回衆議院議員選挙の時には、謙吉らは自由党員のリーダーとして活発に働いている」と項目執筆者の大沢力氏はまとめておられる。『書籍類貸付控』によれば、『革命史鑑』六冊が貸し出されたのは明治二十一年三月のこと。謙吉はすでに明治二十年六月実施の県議会議員補欠選挙に当選。県会議員として活躍していた時期にあった。

おわりに

明治三十四年十月、酒田の地に「書籍購読会」が結成されたことは冒頭にも述べた。会則を幾度も書き直していった様相は「書籍購読会一途」(光丘文庫蔵)に綴じ込まれており、確認するところであるが、会則をみれば、「会員は毎月金拾銭ツツ廿五日マデ醸出スルモノトス」と定められていた。毎月十銭ずつとは言え、同じ綴りには退会届も多く残されている。会費を持ち寄り、なにがしかの書籍を購入し、それを順序よく回覧する。そうした規則が成立するまでには、様々な形の試行錯誤がなされたことだろう。

酒田の地でも、「書籍購読会」のような形態に収斂され結実することなく、あるいは結実したとしてもいつしか消滅していった集いは、少なからず存在したに違いない。生石小学校校長寺内等曜が創設した鮑海読書クラブは資金難で自然解散するが、その失敗を経ることが成沢直太郎等と「書籍購読会」を興すことに繋がっていったと想像するに難くない。その他にも、明治中後期に設置された鮑海郡内の文庫を載す『荘内三郡／教育要覧』(前掲)によれば、会員の醸出金はもとより共同作業による取得金や母体となった

青年会(団)費の一部を文庫維持に充当するなど苦心経営の様が看取される。今回考察した資料から窺えるのは、一円の持株、二円、四円という支払、郵便為替の送料、定価九円の「資治通鑑」といった形で、経費のかかることばかりであった。参考までに、誠信学校における明治十六年の書籍費が十一円五十銭であったことを思えば(誠信学校沿革誌)、この「書籍類貸付控」(資料①)に関わる人々の交流には、多くの資本が費やされていることは言うまでもない。予約出版物に対して、篤実に振り込みをしながらも、追加で二円を支払うということなど、誰でも出来ることではなかったに違いない。富裕層や教師など限られた範囲での貸借と目されるけれど、それでも書籍を希求する人々が集う場が明治十年代の酒田の地にあったことは確認できた。忽卒の間に取りまとめたため、まだ十分に翻刻本文の検証、ならびに考察をし終えていない点は甚だ遺憾ながら、次号では「書籍購読会一途」をはじめとする、光丘文庫に残される資料を通して、多くの人々がいかにかにして読書に勤しんでいくことが可能となったのか、その人々の姿を復元し、垣間見ていきたいと思う。

【附記】

貴重な資料の翻刻掲載を御許可下さった酒田市立図書館ならびに酒田市立光丘文庫に対し、記して深謝申し上げます。